

年間第三十三主日

マルコ 13・24-32

2021. 11. 14

ペトロ・グエン・ヴァン・トアン神父（イエズス会）

高円寺教会での初ミサ

今日、読まれた箇所の前に、弟子たちは「いつ」「どのように」最後の日が来るのか、すなわち将来のことが気になっています。それに対して、今日の福音でイエスは色々な説明をなさいました。「太陽は暗くなり、月は光をはなたず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる」との説明です。四ツ谷駅や新宿駅などでも、イエスと同じように、終末のことを語っている人の声が時々聞こえています。言うまでもなく、駅で終末のことを語っている人たちはその日がいつ来るのか、どのように来るのか、全然知らない、ただ、警告として述べていると思います。なぜなら、イエスでさえ「その日、その時は知らない」からです。イエスは「御父のほかに、誰も知らない。天使たちも子も知らない」と明確に語られました。すなわち、イエスは将来のことというよりも、今のことを考えていると思います。

ここでわたしたちは再び聖ヨハネの考えに出会います。ヨハネは「御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている」（ヨハネ 3・16-18）と強く語られています。つまり、ヨハネによると、永遠の命がこの地上に既に始まっており、イエスを信じ信じないことによってわたしたちが自分自身を裁くということになります。なので、永遠の命、天国、いわば神の国を体験することができるのは、世の終わり、あるいは個人の死の後というより、今日、今こそ、です。今日こそ神はわたしたち一人一人を待っておられます。日々、神はわたしたちの心の扉を叩き続けています。聖ヨハネは黙示録の中で、「見よ、わたしは戸口に立って扉を叩いている。もし誰かが、わたしの声を聞いて扉を開くならば、わたしと共に食事をするであろう」（黙示 3・20）と語っています。そのため、わたしたちは神がドアをノックする音を聞くために、信仰をもって目を覚ましている必要があります。目を覚ましているということは、実際に日々寝ないということではなく、今という瞬間を、神への愛をもって、神を信頼しながら生きることです。

これに関して、ベトナム人の枢機卿、フランソワ・サビエール・グエン・ヴァン・トゥアは、次のような詞を書いています。「主よ、わたしは待ちません。今というこの瞬間を生きる決心をしています。それを愛で満たします。なぜなら点と点をつなぎ何千万もの点をつなぐと長い線になります。瞬間と瞬間がつながり何億もの瞬間が人生を織り成します。正しくつなぐと人生は美しいものになります。それぞれの瞬間を善く生きると聖なる生涯になります。希望の道は一つひとつの希望の点から成り立っています。希望の人生は一つひとつの希望の瞬間から成り立っています。全生涯御父の御心のままに生きた主イエスのように、それぞれの瞬間をわたしは主と結び直したい、新しい契約を、永遠の契約を」。今を生きること、そして、その今を愛で満たすことに生き抜いたら、どんな状況、どんな状態にあっても、わたしたちは、神の愛、神の命、永遠の命、天国を見出すことができると信じています。神の国は「ここにある」「そこにある」「あそこにある」というものではありません。「どこか」という場所や、「いつか」という時期は、問題ではありません。

それゆえ、天国がやがて来ると考えない方がいいのではないのでしょうか。確かに、それはまだ来ていませんが、わたしたちはこの地上で天国を作ることができます。わたしたちの家、わたしたちの共同体、わたしたちの各グループ、わたしたちのオフィスを本当に天国にすることができます。しかし、誤解しないでください。わたしは天国が存在しないとか、それが既に地上にあるとかとは言いません。わたしが伝えたいのは、天国は神による約束であり、その約束の味は、今こそこの地上でも味わうことができます。わたしたちが人間関係を改善し、傷ついた心を癒し、恨みを持つのではなく、許すことを選択し、自分だけに仕えるのではなく、他の人を助けるとき、この地上にいるわたしたちにとって天国が現実のものとなりますが、それは主の約束の前触れに過ぎません。つまり、わたしたちは天国を体験するために死を待つ必要はありません。この地上での現在の生活に愛を注ぎ始めれば、今すぐ天国を体験することができます。天国はわたしたちに対する神の約束です。その約束の実現を、わたしたちが人生に愛を注ぐだけで、今こそ生きる人間として、体験し味わうことができます。Amen.